

青森

青森高校（宍倉慎次校長）の2年生3人によるチームが、オンライン形式で23、24日に開催される「PDA高校生パラメンタリーディベート世界交流大会」に出場する。同校のチームが世界大会

に出るのは初めて。大会は3人一組で英語を使い議論を戦わせ、どちらがより説得力ある主張をできたかが問われる。生徒たちは「各国の高校生とより深い議論がしたい」と練習に打ち込んでいる。（新村菜穂）

青高初出場「深い議論を」

英語ディベート世界大会



生徒たちは「飲食店は夜に値上げをすべきか」をテーマに14日、同校と秋田県の高校をビデオ通話でつなぎ、世界大会に向けた練習試合をした。

大会はテーマに対し、チームごとに賛成または反対に分かれ、ルールに沿って討論する。原稿はなく、討論前の準備時間でまとめたチームの考えを基に、その

パソコンの画面越しに、秋田県の高校生とディベートする青森高校の生徒たち

本番向け他校と練習

場で論旨を組み立てる。

賛成側の相手校は「来店客が減り、新型コロナウイルス対策になる」と訴えた。反対側の青森高は「値上げで来店客が減ると店を経営できない」「来店客の人数制限をしたほうが有効」などと論じていった。

同校は昨年12月に開かれた全国大会に出場し、ディベートの要素を授業に取り入れたカリキュラムなどが評価されて出場約60校中2校の「授業導入優秀賞」を受け、成績上位3校と共に世界大会出場権を得た。

3人は授業だけでなく英語研究同好会でディベートの練習をしてきた。「初めは日本語ですら、言いたいことを伝えられなかった」と小野智寛さん。気兼ねなく意見を言い、話し合う経験を同好会で積み、菅原麻愛さんは「ここに来ると人が変わる。自分の意見を持たないとやっていけない」と笑う。

田村咲帆さんは「うまい人は自分たちのレベルを引き上げてくれる。世界大会も楽しみです」と話す。

東奥日報 2021年（令和3年）1月22日（金）朝刊 掲載

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです